

日本農家の四つ間取りの研究 ——〈西南型〉住宅・鹿児島の場合——

持田 照夫
大河 直躬
持田 昭子
深澤 大輔

標記の研究の昭和 53 年度の主眼は、昭和 50 年度の茨城県・群馬県の田の字型農家住宅及び昭和 52 年度の長崎県対馬の広間型農家住宅の研究により手を染めた「日本農家の四つ間取りの深奥に潜在する平面形成原理の追求」を鹿児島県のオモテナカエ型と言われる農家住宅を研究することによって更に深めることであるが、その研究の経過と結果は次のようである。

経 過

研究組織を二分して歴史班及び計画班とし、前者に大河直躬が後者に持田照夫・持田昭子・深澤大輔が属した。

研究は、調査をし、そのまとめをする形をとり、予備調査と本調査を行なった。今回は、対馬の時のように先行調査がなかったため、本調査の調査対象を決定するのに難渋したし、後補調査も今年の段階ではまだしていないので対馬程の確かさを諸行事や諸儀礼のイメージを掴んでいない。

予備調査は 8 月 2 日から同月 10 日まで、計画班の持田照夫・持田昭子、それに神戸信俊・石田寿信・近藤誠が補助として加わって行なった。まず鹿児島市に行き鹿児島県教育庁文化課・県立図書館・鹿児島県維新史料編纂所等を訪れ資料並びに情報を蒐集し、次に指宿・知覧・蒲生・黒武者・大口・出水等をまわり、江戸時代の姿を残すと考えられる農村武家集落・農村武家住宅・百姓門集落・百姓門住宅を見学採取して本調査の基礎資料とした。

本調査は、11 月 20 日から翌 12 月 5 日までだったが、計画班は持田照夫・持田昭子・深澤大輔が神戸信俊・石田寿信を調査補助員として入来町大馬越の黒武者部落・同町浦之名栗下及び松尾の悉皆調査を行ない、それぞれ 16 戸／19 戸・9 戸／19 戸・12 戸／21 戸の住宅平面の採取と生活聴取を行なうことができた。黒武者と栗下は集落図も採取した。この 2 部落はともに門集落であるが、松尾は武家集落である。一方、歴史班は大河直躬が丸山純を補助員として黒武者の黒武者富士夫宅や入来町麓の東郷宅・大口の祇答院宅・出水の税所宅伊藤宅等 10 数戸の歴史用精密図面採取を行なった。なお、計画班は上記の調査以後南薩の川辺町・知覧町に入り、1 室住宅や門集落・同住宅の調査を行なった。

結 果

以上の調査の結果、次のようなことが分って来た。

鹿児島県下の農村住宅は、これまでの説では武家住宅も農家住宅も原則として、オモテとナカエと言う空間からできていると言われる。これは西南諸島の住宅が、ウムティとトーグラの 2 棟 B 至空間からできているのに似ている。しかし、より本質的には後述するようにオモテ（母屋）が「田の字型」ではなく、「オモテ型」とでも呼ぶべき間取りを持っていると言うことである。また、鹿児島県の住宅では、オモテ棟の一番奥のトコノマ付の部屋であるオモテノマには、太い梁があらわしになってかけられており、天井がない。一の接客空間がこのようにつくられている例は、古い家を除き、これまで調査した範囲ではどこにも見られなかったものである。何故、このようであるのか。これをつきとめるのはむずかしいが、生活を見ることがこのことの解明への一つの示唆を与えるであろう。

鹿児島県の生活は、これまで茨城・群馬で見えて来た本百姓的ムラ生活とも、また対馬で見えて来た御館集团的なムラ生活とも異なる別のものである。百姓は門と言数軒の小集団が基本になって、それがいくつか集まってムラを形成しており、武家は麓（府元）と言う一集落に整然と 10 数戸からなる馬場と言小集団を単位にして居住していたのである。武家集落はこの麓の他に農業武家集落もあり、士階級ではあるが、農耕集落を形成しているものもあったのである。この集落においては、ムラははっきりした地域生活集団をなしていなかったようである。この武家は、本百姓ムラのように地域に頼ることはせず、主に親族に頼って生活していたようである。このような生活は住宅にも反映している。形は四つ間取りで田の字型をしていても、生活は田の字型ではないのである。これは関東北部の田の字型・対馬の広間型とも異なる、『西南型』とでも言うべきものである。これを解明すれば、《昔の農家の平面の構成の主要要因が、勿論生産の中にあるわけではなく、また家庭生活の中のみにあるわけでもなく、社会関係（イエムラ、イエーシムラ関係）から来る社会生活の中にとそあるのである》と言う仮説がより鮮明に証明されることが期待できる。

1. 〈西南型〉農村住宅研究の必要性

これまで日本の伝統的農村住宅の間取りを研究して来たが、研究が現在どこまで来ており今何をなすべきかを知らるために、この研究の経過の軌跡を辿って見ることにしよう。

農村住宅の本質を知るために、まず①茨城県及び群馬県において、在来の農村における最も一般的且つ普遍的な農村住宅の型である「四つ間取り型」または「田の字型」と呼ばれる住宅型の研究をすることにした。この研究で、「四つ間取り型」「田の字型」の平面構成とその平面形成の原理についての仮説が打ち立てられた。それは、『接客のA空間と家族用のB空間の拮抗的均衡の結果生れたものである』と言う仮説¹¹である。実際の設計においては、A空間は無用のもの・縮退させてもよいものと考えられ、玄関付の農家においては玄関空間の一部に縮退させたり、公私室型の間取りの家ではA空間的機能を無視¹²したり、A空間的機能を認めたとしても所謂“公室(L)”にこの機能を負わせよう¹⁴したりする処理方法がとられているように見える。このような行き方は、上述の研究結果から見ると否定されるのである。「四つ間取り型」「田の字型」の平面構成及びその年次の動向・そこで行なわれる儀式を含んだ生活とその構造を仔細に点検するならば、上のような処理はとれないのではないかと考えられる。「四つ間取り型」「田の字型」は相当頑固で、なかなか消滅したり縮退したりしないのである。それどころか地域によっては「中廊下型」から「田の字型」に戻っている現象¹⁵さえ見える。つまり、A空間は無視できないと言うことである。何故無視できないのかと言うと、それはA空間がムラ生活のためにあり、イエがムラの中で存在可能なため、A空間でのムラの行為・行事・儀式が優先¹¹されるためと考えられる。

しかし、このことをより深く研究するには、A空間の性格がよりはっきりと出ている平面型・その平面の中で行なわれた生活が残っている地域の生活を研究する必要がある。A空間の性格がはっきり出ているのは、広いヒロマのある「広間型」である。そこで、現在まだ「広間型」の平面・「広間型」の生活を残しているところを研究することにした。②長崎県対馬はこのような条件のところとして選ばれた。この研究の結果、A空間は正しくムラ行事・ムレ行事のための空間として存在していること、イエはムラ・ムレの中であってこそ存立可能であるので、イエの中のことよりイエとムレの関係・イエとムラの関係のことの方が優先¹⁶されること、等が明らかに¹⁸なった。つまり、ムラを構成して行くためには、A空間が必要であったと言うことである。

こう見て来ると、A空間は農村住宅の中に必ずなければならないように見える。が、われわれはもう一つ困難

な現象に当面せねばならなかったのである。それは、古い農村住宅であるにもかかわらず、このA空間またはA空間的な空間が見当たらない農村住宅型があると言う事実に行き当たったからである。鹿児島県・一部宮崎県から西南方沖繩にかけて拡がっている「オモテーナカエ」型、所謂分棟型などと言われている農村住宅がこれである。この型には、オモテの中にもナカエの中にもA空間またはA的な空間は見られない。空間構成の根本が違うのか、それともその中の生活が異なるのか。そこで、③鹿児島県の西半分薩摩郡の農家住宅の研究をすることにした。その研究が本研究である。

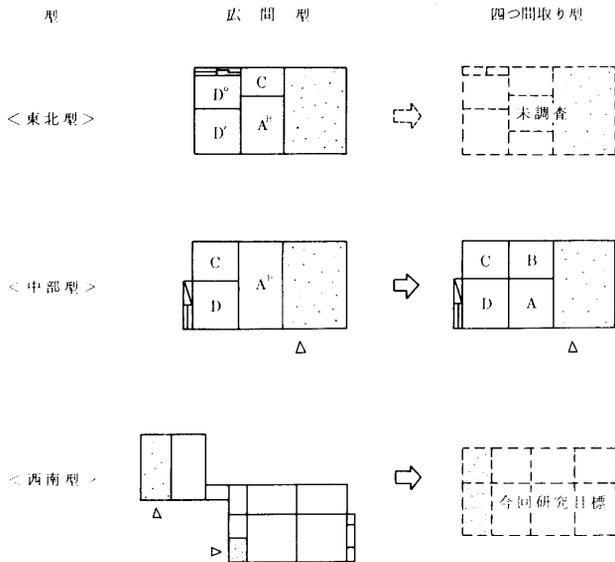
本研究の結果は、日本の西南農村の農村的集団のあり方の違いを示唆している。しかし、ここでこのようなことを速断することはできない。もう一つの見方、つまり農村住宅の平面を文化的伝播の産物としても検討して見なければならぬからである。この問題の解明は、沖繩等西南に延びている帯の地帯の研究を行ってはじめて可能であるので、そのような検討は後の課題として残された。

2. 〈西南型〉

表題に〈西南型〉と言う見なれない型名を出したので、ここに少し説明しておきたい。これは新しい概念による型分けの名で、このような型分けで追求すると、従来の平面型も更に深い意味を掴みとることができる。

日本の西南地方には、「田の字型」のA空間・「広間型」のA^B空間に当る部屋を持たない平面の農家が分布している。鹿児島以南沖繩にまで拡がる所謂「分棟型」などと言われる〈ナカエ〉—〈オモテ〉型¹⁷の住宅である。この型では、ナカエをA、オモテをC・Dと言う風に見なすことができないのである。用途がまるきり「田の字型」や「広間型」とは異なる。外形も家の横または横前に玄関があり、そこを入るとすぐ続き間のザシキがあり、都会の住宅に似ている。が、裏はナンドと控えの間を兼ねたような部屋がいくつかあり、形としては「四つ間取り」のような貌をしている。これを間違っ「田の字型」とか「四つ間取り型」と言っている人もいるが、これは平面の実際に合わない概念である。やはり、「西南地方のオモテ型」とでも言うべきものであろう。何故このような生活的意味を持っているのか。これらをこれから究めて行かなければならない。

因みに、この鹿児島以南沖繩までの住宅型を〈西南型〉¹⁸と名づけることにしたが、これはこれまでの「田の字型」とか「広間型」と言うのとは分類のし方が違う新しい型の分け方である。では、これまで群馬県や茨城県・長崎県対馬等で研究して来たものはどうなるのか。われわれはこれを〈中部型〉¹⁹と名づけることにした。そして、もう一つ東北から本州脊梁山脈に広く分布しているものを、



〈東北型〉¹⁰と名づけることにした。北海道を除いた日本列島の古い農村住宅型は、大きくこの三つの〈型〉の中に含まれると考えられる。この大分類は、「広間型」「四つ間取り型」を貫いている共通性格について言っているのである。図に示せば、次のようになるであろう。このような整理のし方をして見ると、次のような追求が今後必要なことがわかる。

- I₁ 〈西南型〉の在来の型の採取とその中における生活の採取
- I₂ 〈西南型〉の現代の変化の方向と生活の変化
- II₁ 〈東北型〉の在来の型の採取とその中における生活の採取
- II₂ 〈東北型〉の現代の変化の方向と生活の変化
- III₁ 〈中部型〉の在来の型及びその中における生活の上述仮説検証例増及びダメ押しの採取
- III₂ 〈中部型〉の現代の変化の方向と生活の変化の上述仮説検証例増及びダメ押しの採取

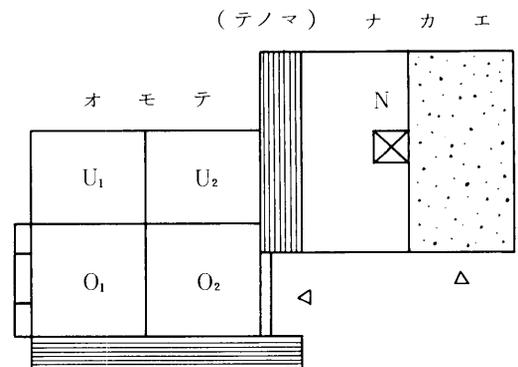
このようにして、あと北海道を加えれば全国の伝統的住宅平面型及びその現代の変化の方向の全貌が分かるのである。日本の農村住宅の全貌及びその中に流れている共通した或る流れを知るためには、上に述べた過程の全部を調べなければならない。が、ただ今のところは、他の住宅型と截然と区別される〈西南型〉をまず第一に追求しなければならない。

3. 〈西南型〉住宅平面の一般型

平面〈西南型〉は、一室住居から部屋が多数ある型までの多くの型を含むが、共通していることは母屋にオモテとウチザ(ウツザと発音)と言う空間があると言うことである。棟がオモテ(母屋)とナカエ(中家)に分れているのも特色ではあるが、ナカエがない農家もあるので、オモテの間取りを第1の特色としたい。

このオモテは普通2間から成っており、上の床の間のある方を「カンタンマ」(頭の間の意か?)、下手の方を「シモンマ」と言っている。または上の方を「イチバンザ」、下の方を「ニバンザ」と言う家もある。このような家の中には、うしろのウツザの方も番号¹¹で「〇バンウラザ」等と呼んだりする。このように空間が機能でなく、部屋の格で考えられている。

部屋を記号化する場合、空間のしつらえもまた機能的にも「田の字型」のA・B・C・Dとは異なるので、これと同符号をつけるわけには行かない。そこで、オモテの頭文字をとって上手の間を「O₁」空間、下手の間を「O₂」空間、ウツザの頭文字をとって上手の間を「U₁」空間、下手の間を「U₂」空間、ナカエを「N」空間と呼ぶことにする。その符号をつけて見ると典型平面は次のようになる。



● 平面的特色₁ オモテ(母屋)のオモテ(O)とウツザ(U) まず玄関を上ると、シモンマ O₂空間があるが、これとカンタンマ O₁空間との間仕切りは、「田の字型」のA || D仕切りの板戸(帯戸)と異なり襖戸であり、天井も昔は O₂のみならず O₁にもなく梁がむき出しになっており、O₂から O₁まで縦に一本のものが長い梁の形で続いたのである。玄関は、「田の字型」の土間と異なり、広さも狭いしふだんそこにムラビトが立入るようになっていない。座敷についている玄関のようである。従って、O₂空間も下座と言う感じはせず、上の間の続きとしてしつらわれている。この玄関・O₂・O₁空間のうしろにウツザ U空間があるが、U₂はウツザと呼ばれたりナンドと呼ばれたりしている。U₂の機能は B とは異なり、全くオモテでの接客に対する待機・準備・配膳・通路、時には O の拡大のための空間であり、U₁は C の機能の外接客時の物置・着更場・他の使用客間で、対馬同様な全体が接客のためにできていると言う感じである。

● 平面的特色₂ オモテとナカエ オモテ(母屋)では正客をもてなすが、客について来る下来や付人はナカエで休息させ接待する¹²。また、この家の奉公人や家内はナカエで食事・休息・採暖・談話等を行ない、主人が見えたときは床に手をついて礼をする¹³。これらの奉公人は士の

家では決してオモテの方には行かない。また主人もナカエの方には滅多に顔を出さなかつた^{*13}と言う。

ナカエは粗末にできており、板の間・土壁粗仕上げ・天井あらわしでイロリがある。土間がやや広くとってある場合が多く、そこに農耕用具・精穀用具・大工用具・家事用具等が置かれる。餅搗き等もこの空間で行なわれる。

現在は、このナカエはかなりA的空間に変化し、主人を含んだ家族の常の居間・休息・採暖・喫茶・喫煙・閑談・仕事の計画・仕事の相談・近所及びその他からの来客うけ・外信うけ等の場になっている。

●しつらえ的特色 これまでA的空間がないことを述べて来たが、しつらえも「田の字型」のAや「広間型」のA^Bにある“神棚”がない。“オセンソサマ”と言う位牌とも異なる先祖牌がO₁空間にあるだけである。仏壇はあるが、O₁またはU₂空間に置かれている。

4. 鹿児島県入来町等の農村住宅調査概要

●調査の種別◇予備調査及び本調査から成り、本調査は計画班と歴史班が全部は重ならない調査を行なった。後補調査はまだ行なっておらず、将来の課題として残された。また、今回は先行調査は行っていない、持田がかって鹿児島大学に居りこの地方を研究した些少の経験があるので、それに頼った。

●組織 計画班と歴史班に分け、前者に持田照夫・持田昭子・深澤大輔が、後者に大河直躬が所属した。尚この他、研究補助員として前者に神戸信俊・石田寿信が、後者に丸山純が加わった。予備調査は、持田照夫・持田昭子が、研究補助員として神戸信俊・石田寿信を、調査補助員として近藤誠を伴って行なった。

●期間 予備調査は昭和53年8月2日～10日の9日間、本調査は計画班が同年11月20～12月5日の16日間、歴史班が11月24日～29日の6日間である。

●対象 予備調査をして、計画班の調査対象地を鹿児島県西半にある入来町・知覧町に、歴史班の調査対象地を入来町・大口市・出水市にすることに決めた。

何故鹿児島県西半にしたかと言うと、鹿児島県緊急民家調査及び県文化財担当者の情報等により、鹿児島県東半は比較的新しい開拓地であり古いものを調査するなら東半より西半の方がよいこと、西半には旧い型のものも籠にしても門にしても残っていること、等が分ったからである。

また、本調査で計画班・歴史班とも何故入来町を重点にしたかと言えば、籠集落・門集落とも住宅・集落とも旧い形態を残しておるからであることは言うまでもないが、その他地理的に都市に遠く生活も変化を受けにくいこと・地元^{*}に立派な郷土研究者があること、地域的に

まとまりがありその拡がり^{*}が研究上適当であること、等の理由があったからである。

本調査では、計画班は入来町の松尾・栗下・黒武者の3集落の全戸調査を行なった。この他、知覧の松山の3門や川辺町の2住宅を調査した。歴史班は、入来町の2集落・大口市・出水市の農家住宅及び武家住宅に対しても点採取調査を行なった。

●内容 計画班は、住宅に関しては、①平面図採取、②室内展開図及び仕様採取、③生活図採取、④現在の生産・家事・家庭生活の聴取及び採図、⑤現在の儀式・行事・接客生活の聴取及び採図、⑥過去の生産・家事・家庭生活の聴取及び採図、⑦過去の儀式・行事・接客生活の聴取及び採図、⑧外観及び室内の35mm写真撮影及び8mm映画写真撮影を行ない、屋敷に関しては、①平面図採取、②生活図採取、③生産・家事・家庭生活の聴取及び採図、④儀式・行事・接客生活の聴取及び採図、⑤35mm写真及び8mm映画写真撮影等を行ない、更に集落に関しては、①平面図採取、②屋敷名・田畑山林地目・広場・神社・仏閣・池川・記念碑・塔・墓・その他建造物記入、③生活図聴取記入、等を行なった。歴史班は、①平面図採取、②断面図採取、③民家調査式構造・間仕切り・細部詳細記入、④痕跡図採取、⑤復元平面図作成、⑥建設年次・使用等の聴取または物証による調査、等を行なった。

5. 鹿児島県農村の概要

伝統的な住宅や集落を追求するためには、それらを生み育て保って来た社会を知らねばならない。

●府元制度 鹿児島県においては、伝統的な農村住宅や集落が生み出されていた社会は、「籠^{フモト}制度」とも呼ぶべきもので、対馬の「御館^{オノカネ}制度」ともまた異なるものであった。

島津藩は、鹿児島市に城を持ち城下士を蓄えていたが、地方の士を全部城下に呼び集めたわけではない。地方は郷に分けられ、その郷の中心に士の集団が置かれていた。これを集団名及び集落名として籠と呼んでいる。この士集団が自分の知行地ももらいました藩の直接知行地の監督等もまかされて支配の業務にたずさわっていた。

●外城^{トシノウ}制度 藩は、以上述べたような籠を中心とした郷を外城^{*14}として、その支配者として地頭を置いた。地頭は城下士の中から選ばれ、外城の地頭仮屋に赴いて治めた。このように、藩を分画して外城としたが、その数は115程であったと言う。また藩には、地頭支配地以外に一門4戸・一所持17戸・一所持格41戸など私領主の持つ地域があり、「家中」と呼ばれる家臣団が郷の籠同様の形態をなして住んでいた。入来はこの私領地の一つであった。

●郷の構成 籠・門・浦町・野町から成る。籠は郷士の集住的居住地であり、門は農家居住集落、浦町は漁家居

住集落，野町は商家居住地区である。この他，武家でありながら農業集落を形成しているもの・門集落のあるムムの中に点的に武家が入っているもの等があった。^{*15}この麓・門・浦町・野町は有無相通じ，4つがあることによって生活の一単位が完成されたと言う。郷が自給的な一国のようになっていたのである。

●集落の構成 麓は10戸～15戸程の「馬場」と称する小居住集団で構成されていた。これは，農村のムラや門と異なり，また近世的なマチとも異なる。人為的な軍事集団の最小居住単位であり，行政単位である。この中で相互扶助はムラのように行なわれず，馬場の中の行政もムラ的自治的ではない。また，一門一統が固まって住むのでないのて，門集落のようでもない。馬場の集りは軍事的・行政的の外は祭り等行なわない。

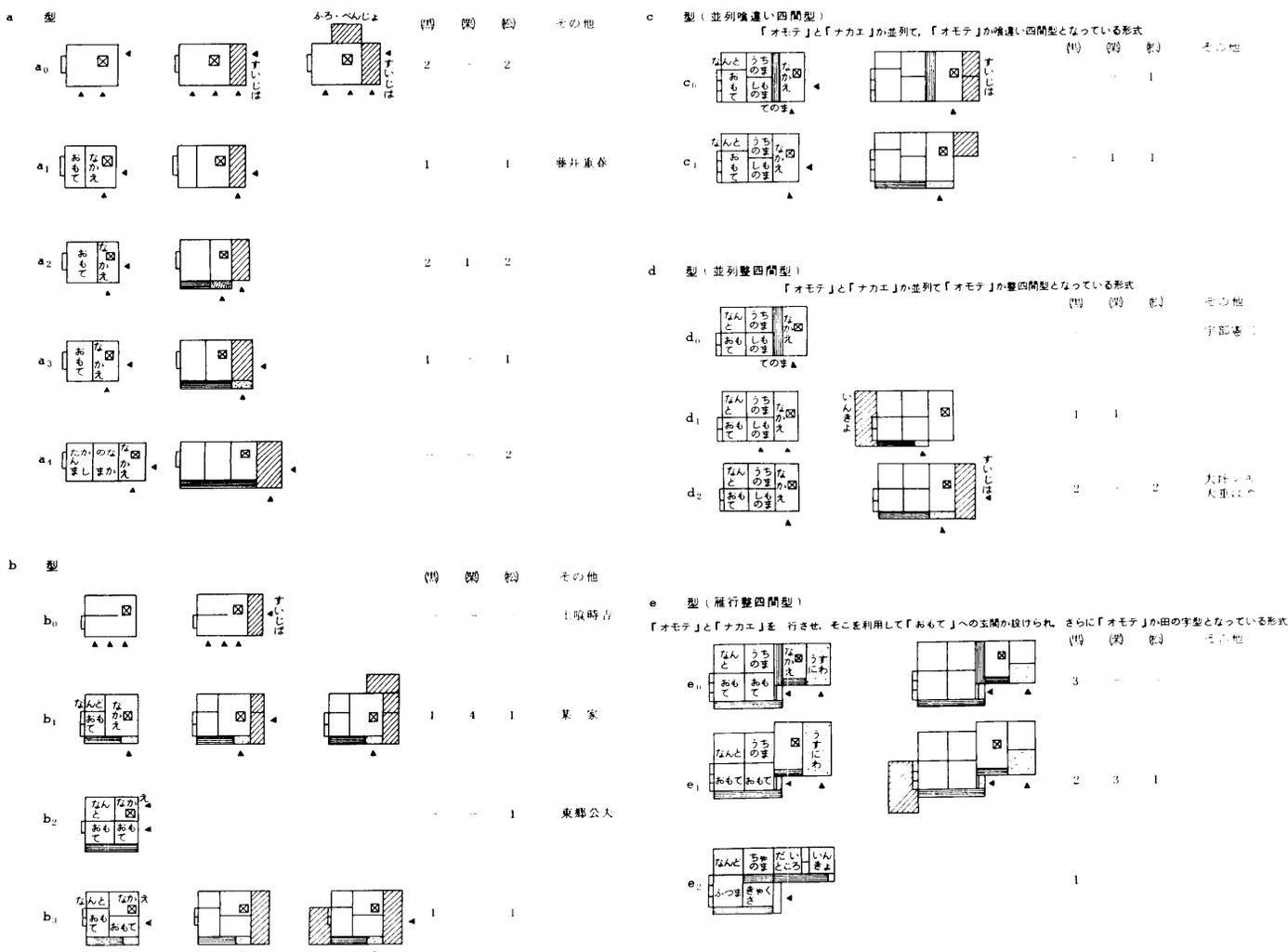
門集落は門がいくつか集って形成されている。門は同姓の家の集りで，藩政時「門割」と言って家毎にでなく，家の集りである門毎に農地等が割り与えられたと言う。門内各戸は同姓の家でできており，門の集りの行事をしていた。^{*16}

^{*16}農業武家集落は，武家が入植してできた集落で，農業をして自活していたのである。この土地は瘠せて狭かったが，百姓と違い年貢の割当・そのための耕作の割り当てである「門割」等がなかったのて，門と言うものもなかった。耕作武家の集合の形をしていた。

●現在の農村への影響 これまで述べて来た政治体制は明治になってなくなったが，それまでにつくられた生活や集落や住宅の体制は長く残され，戦後の農地改革後もかなり長期にわたって前の体制のまゝであった。最近，交通・流通・就職等の面で大きな変革がなされ，農業の相対的低下等も影響して農村は急速に変わろうとしている。住宅は古いものが少なくなり，集落も内容が変わろうとしている。

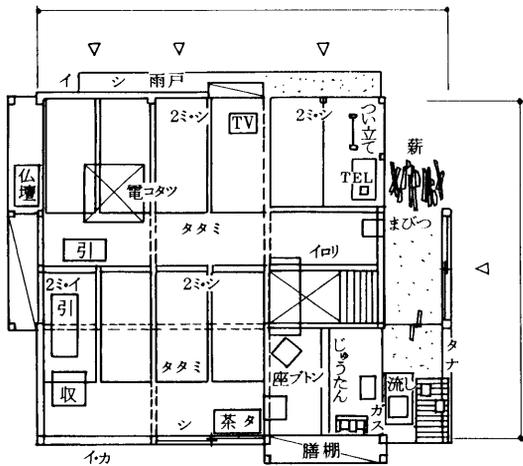
6. 鹿児島県の農村住宅の型

われわれが調査した入来町大馬越黒武者（門集落5門）同栗下（門集落1門）・同松尾（武家集落）・同町麓（武家集団2馬場）・その他（大口市，出水市・知覧町等）によると，住宅の型は次のように分類できる。^{*17}

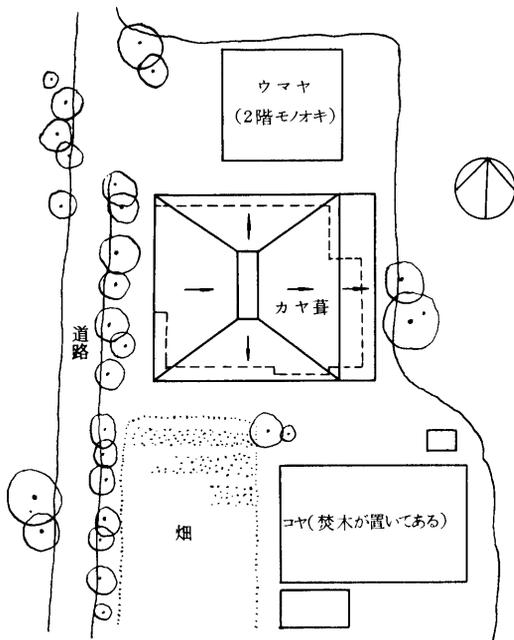


仏壇に近い方から格の高い客が入る口で、一番下は村の人達が上る口だと言う。この一番下の口から入ったところは現在タタミになっているが、元は土間だったと言う。それで今でもこゝをイタシキと呼んでいる。つまり、土間入り口・床上の入り口・床上の上入り口の3つがあったと言うわけである。この部屋にコタツがあり、われわれも床上の上入り口から通されて接待されたが、長男（S4生れ）の結婚式もこの空間で行ない、来客の入り口も床上の上入り口から、挨拶もこの部屋で行なったと言う。

時吉さんは昭和2年に結婚し、5年後にこの家をつくってもらったが、村の人の協力扶助を得たと言う。萱葺きであるが変わらまじっているようであり、今屋根が朽ちて雨もりがしている。時吉さんは老年なのであるが、独りでそれを修理していた。あと何年かは保つと言うことであった。子供は長男ばかりでなく、次男・長女も外



土喰時吉 現状平面図



土喰時吉 配置図

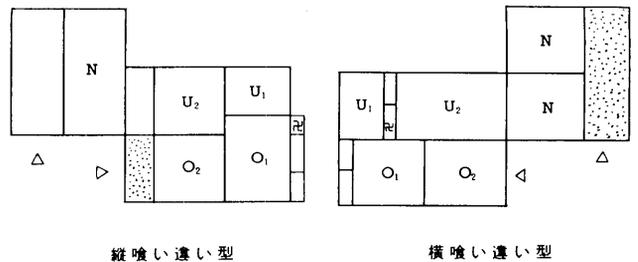
に出て家にはいない。

ウチ様空間のナカエは、就寝用・休息用・食事用・炊事用に当てられている。

c 型

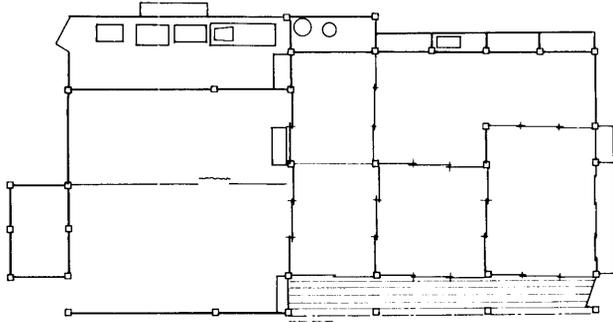
● c₁型 折田義照宅 入来町浦之名栗下5966

平面型 この家は表奥の間（オモテ）が縦長になり、表下の間（ナカンマ）と喰違っている形の「縦喰違い型」の平面型の家である。この型はかなり多く、鹿児島大学の卒業研究においても、数例が採取されている。後述の黒武者富士夫氏宅も、元はこのような平面の家であった。このような平面だと、O₁空間の客にU₁空間を通して結仕できるので、昔型の接客には便利であった。従ってこのような「喰い違い型」は、縦のみでなく横のものも存在する。U₂が横に長くなっており、O₂ばかりでなくO₁にも3尺位かゝっている型で、やはり給仕に便である。後述の知覧町松山の松山謙誠氏宅をはじめ野上寿吉氏宅・山元力三郎氏等門上層部の大邸宅が皆この型であり、これが鳥羽沖の島嶼にも分布しているのを発見した。広い分布圏を持っていそうである。

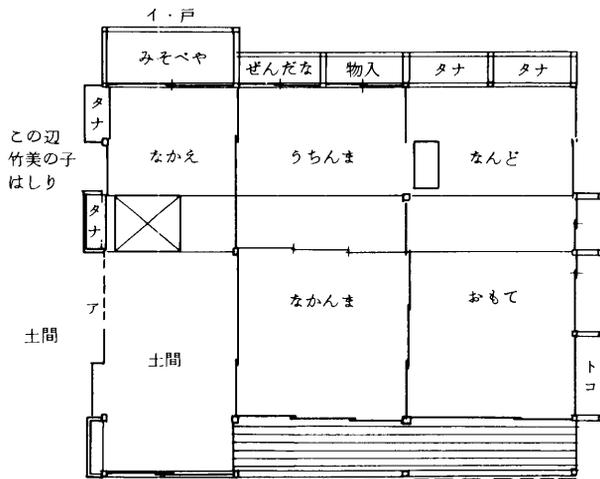


・室名 トコノマのある部屋O₁を「オモテ」と呼んでいるが、他の同型平面でもこの部屋は同様に呼んでいる。O₂は「ナカンマ」と呼ばれているが、他の同型平面でもナカンマ・ナカンザ・ソトノマ等と呼ばれている。U₂はこの家では「ウチンマ」であるが、他家ではウツザ・ウチノマ・オクノザ等と呼ばれている。U₁は、この家では「ナンド」であるが、他家でもナンドである。「ナカエ」がこの家のようにO・Uについているのもあれば、黒武者家のようにテノマを介して両者が雁行的に接合しているものもある。

・室内 表は、土間・O₂・O₁と空間が並んでいるが、ナカンマ（O₂空間）は床はタタミ、仕切りは襖で、天井は竿縁であるが下に土間から梁が渡されて見える。オモテ（O₁空間）もタタミ・フスマ・竿縁天井であり、梁が見える。U₂空間もタタミ・竿縁天井、U₁も同様であり梁が見える。昔は、O₁、O₂に天井がなかったと言う。



折田義照 現状平面図



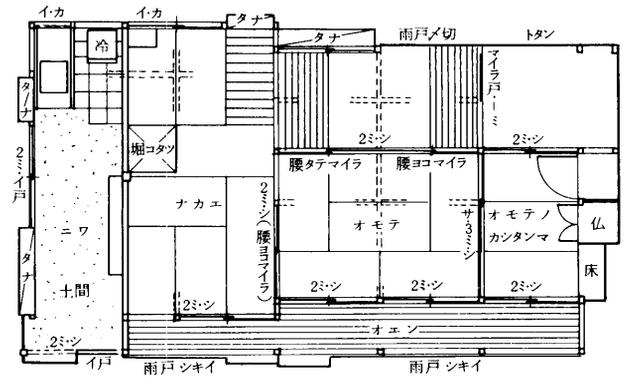
折田義照 復元平面図

d 型

- d₂ 型 大坪シモ氏宅 川辺町高田1429

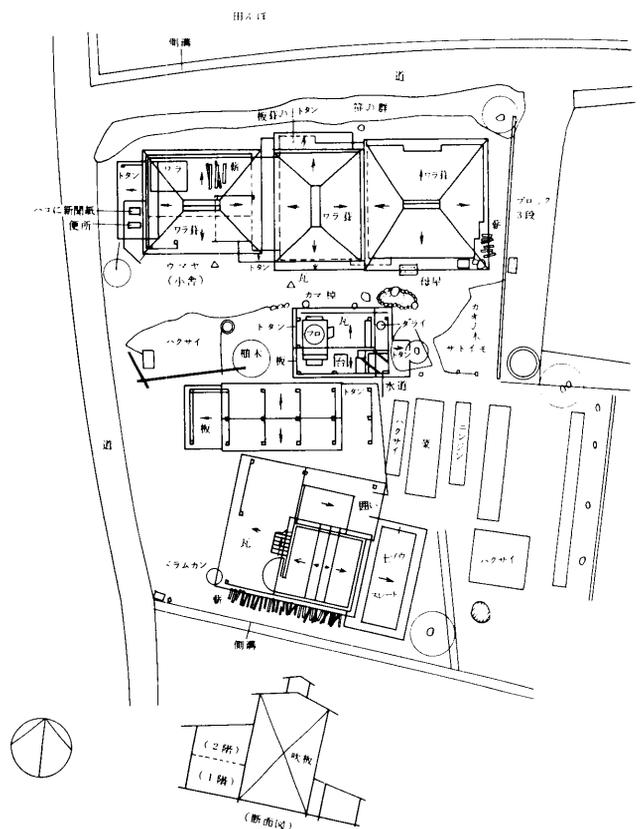
手前から小舎・中家・母屋の棟があり、入って行くとこの3つの棟が姿よく見える。中家の棟と母屋の棟の間はテノマトイでつながれている。

住宅の平面は、中家の部分に土間とナカエ、母屋の部分にオモテ部分2間ウツザ部分2間が入っている。ナカエは床はタタミ、壁は粗仕上げ、天井はない。真中の元イロリであったと思われるところにコタツがあり、奥にカマド・タナが設置されている。オモテとの境は腰部分がヨコマイラドになっている。オモテは、上の間と下の間から成っており、上の間は3帖でタタミは麻布の縁付、天井は竿縁天井になっている。下の間は6帖でタタミ床・腰マイラドである。古く且ついたんでいたので恥づかしがって中を見せなかった故、外からうかがい知る程度しか記述できなかった。



d₂ 型

大坪シモ 平面図



大坪シモ 配置図

e 型

- e₀ 型 萩元善吉氏宅 薩摩郡入来町浦之名

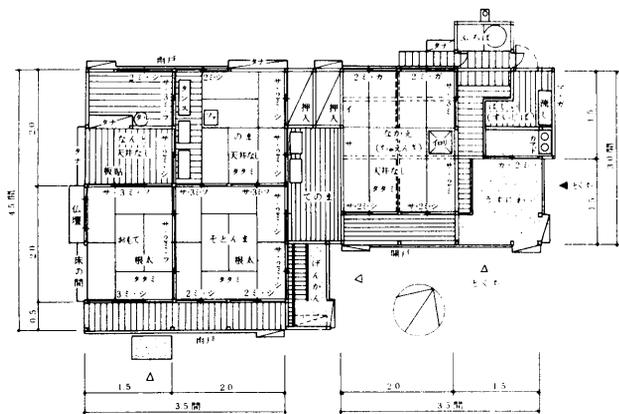
(小字黒武者)

黒武者部落には黒武者・萩元・上野・田中・栗下の5門があるが、善吉氏は萩元門の門長の家である。この住宅は18C末頃の建設であり、萱葺きの母屋を残している数少ない例である。間取りは、テノマを介して田の字型に仕切られたオモテの棟とナカエの棟とが接合されている。オモテの棟にゲンカンがある。

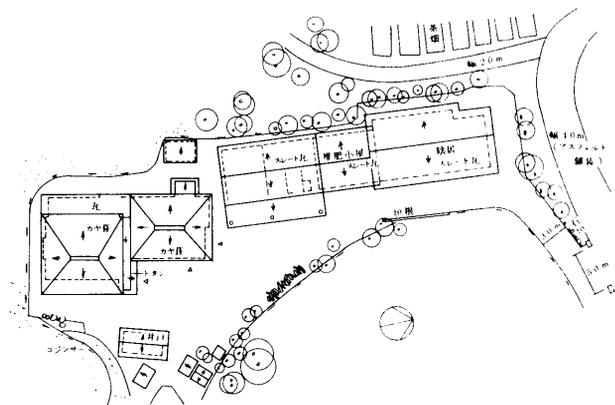
オモテの棟の一番奥がオモテの間であり、仏壇とトコ

ノマがある。次の部屋がソトンマであり、奥にウチノマ・ナンドが連なっている。仕切りは内部は襖、外部との境は障子である。

ふだんはナカエのチャエンザにあり、オモテはほとんど使わず、われわれが訪れたときも戸がしめられていた。正月の行事はオモテの間で行ない、戸主が仏壇側に、門の親類がその下座または対座に坐って儀式をすると言う。



萩元善吉 現状平面図



萩元善吉 配置図

f 型

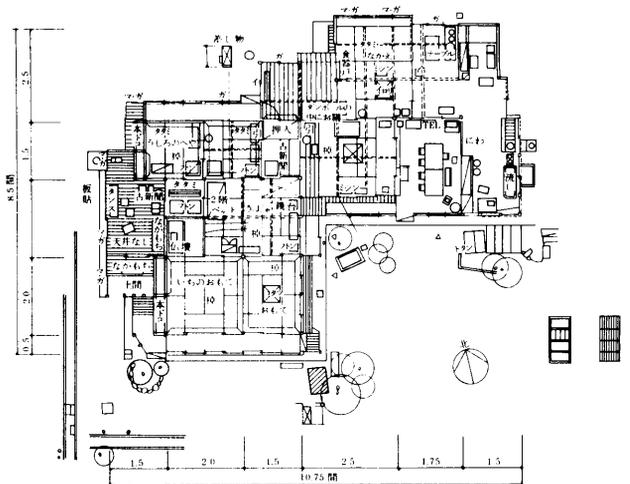
- f₀ 型 松山謙誠氏宅 川辺郡知覧町塩屋1524

知覧町の南部農村地帯に三つの大きな門がまとまっているが、その中の有力門松山門の門首（名頭ミョウズと呼ばれている）の家である。この門は十数軒であった。宝歴に16～20戸を分けて杉山・若松の二門に2分し、若松はその後姓を野上にかえたと言う。

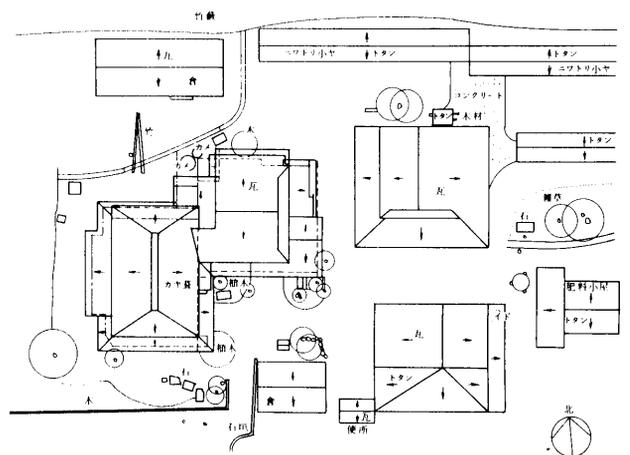
この家の平面はオモテが三列・ナカエが二列の大きな家で、オモテは最前列がイチノオモテ・ニノオモテの2室。中列がウッジャとニンメンの2室、但しこの2室の間は仏壇の間・フトンの置き場で仕切られている。最後列はウシトンヘヤ（うしろのへやの意）2室である。ナカエはニワと呼ばれる土間とナカエと呼ばれる床上とに分れるが、床上は手前の室と奥の室に2分されている。

手前にはコタツがあり奥の方にはイロリがある。入り口は、ナカエのニワ口とオモテのニノオモテ前（玄関）の2箇所ある。ナカエとオモテは床高が違い、オモテの方が20cm（195mm）ばかり高い。この家は建設年代は不明であるが、オモテ部分は約200年前に建てられたと言われており、このような型の先駆的なものと考えられる。このような様式の住宅は、若松門の名頭野上寿吉氏や中木原の名頭山元力三郎氏宅などに見られる。野上宅はナカエ・オモテの床高段差が165mm、山元宅は205mm。両者とも松山宅より新しい。山元宅はこの地方きっての財産家であったので、元からあるナカエは勿論後補のオモテの空間も材が太く仕上げも立派にできている。

正月は、ブラクの人、ブンケのシムルイの人々20何軒かが、玄関から上ってイチノオモテ・ニノオモテの下座に坐り、二重三重の折詰重を出してもてなされる。お互他の家にも行く。これを“ぐるぐるまわり”と称している。明治41～42年頃までこのようなやり方が続いた。玄関はニノオモテの庭側にあったが、謙誠氏が昭和5年頃塞ぎ、昭和7年に今のようにした。正月の村の客



松山謙誠 現状平面図

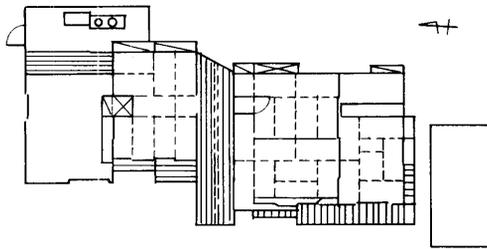


松山謙誠 配置図

は、昔の玄関から入った。

g 型

- g₀ 型 黒武者富士夫氏住宅
薩摩郡入来町浦之名 3616 (小字黒武者)

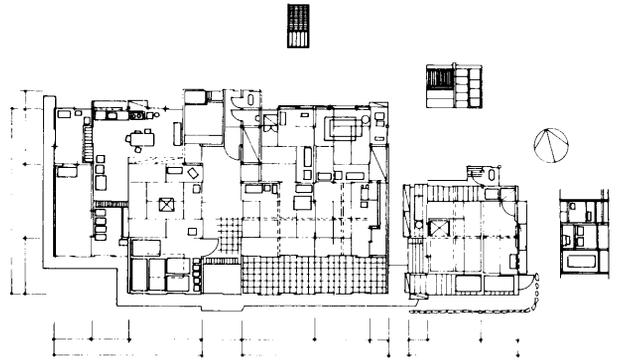


復元平面図 (f₀型)

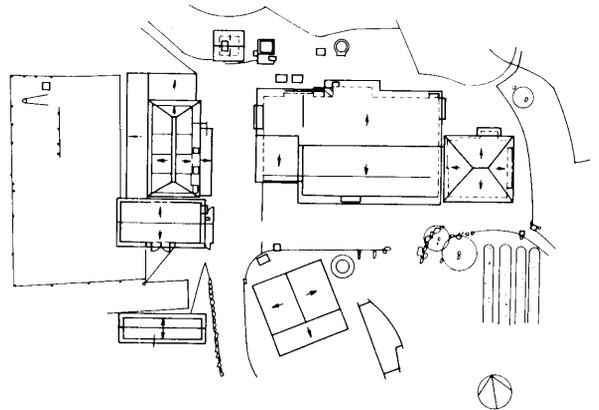
この家は黒武者門の門首の家である。この部落には神社があるが、この家で管理しており、家の中にも神をまつてある神棚がある。このようなしつらえは、他にあまり見ないものであって、前述知覧町松山塩屋の松山門の名頭(ミョウズ)の家のウツザにこれが飾ってあるのを見ただけである。松山門もムラの神社があり、荒廃していたのを復興したと言う。それに対し、土になると農村に居住して武家集落を形成していても、そこには武の信仰の神社がある位でこのようなムラの集りのための神社がなく、家の中にもオセンソ様と言う祖仏牌がトコノマに置かれ(東郷家他)、ウツザの方に仏壇が置かれる型が一般で、神棚はないのである。ここに、横の相互扶助に頼らざるを得ない百姓と言われた人たち、つまり門と言われた人たちの集住のし方と、上下関係・主従関係をまず何よりも重く見る士・籠と言われた人たちの集住のし方の差を見ることができはしまいか。

この家は嘉永年間の建設と見られ130年程経ている。最近間取りを改造し、現在のような田の字型のオモテにしたが、以前は真中にテノマをはさんだ、オモテくい違い型のC₀型であった。

12月24日、黒武者の人々(門の人々3軒)が集ってお祭りをする。昔は家族づれであったが今は代表だけが集まる。一年にできたものを神様にあげる。甘酒・赤飯等も上げる。場所はオモテのカンタンマ及びシモンマであった。正月の会もオモテのカンタンマ・シモンマで行なった。昔はムラ中一軒一軒お互にまわっていたが、戦時中から行なわなくなった。黒武者門の各家の主人皆が、この家のオモテの2室に並んで挨拶するようになった。その時この人たちにゼンを出した。来る人はオモテを持って来た。結婚式・葬式・法事もこの部屋で行ない、新年会・忘年会もここで行なった。部落・婦人会・寄合のための会合は、皆ナカエを使った。神社は12月31日除夜の鐘が鳴るとおまいりした。



黒武者富士男 現状平面図



黒武者富士男 配置図

- g₂ 型 古川益澄氏宅 薩摩郡入来町浦之名松尾

3271番地

この家は大きな農家で、瓦葺きの母屋の他同じく瓦葺きの隠居屋、瓦葺きの土蔵、スレート葺きの元なかえを移築した物置、トタン葺きの農具置き場、鶏舎、便所2棟から成っている。前出萩元善吉氏宅が5棟並んでいて、それが鹿児島地方の棟の並び方の典型であると言われているが、農業を正常にやって行くには、この程度の建物が必要であったと考えられる。

母屋 中廊下型のg₂型で、前列オモテノマはトコノマ・ナカンマ・チャノマの3室に見えるが、実際はそうではなく、d型同様おもてとなかえが接合して一棟になり、区切りのない平面型になった場合の内容を持っている。従って、前列のチャノマはオモテノマの仲間には入れることはできない。機能も近代的A空間的なものになって来ていると考えられる。

チャノマは、カッテグチから入り上るが、前方からもエンを通して上ることができる。この点旧い形式を残している。一方、近代的な空間として外横隅に2帖の小部屋が勉強室としてとられている。これは対馬のドウジを改造してつくったチュウニカイに似ている。これなどは個室を与える新しい動きである。

オモテノマは、トコノマ(O₁)・ナカンマ(O₂)の2

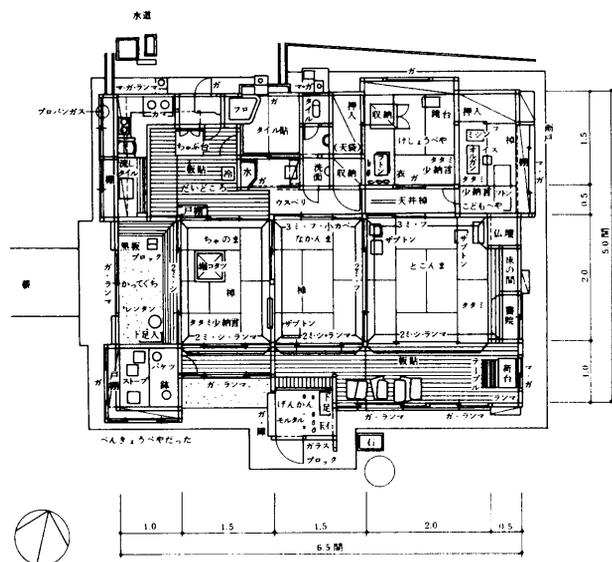
空間であるが、両空間の間は襖戸仕切りであり欄間もつくられ天井も竿縁天井で一体空間であることを示している。ナカエの前にゲンカンをとり、旧い形式の出入り口を再生させ残している。廊下を広くとってヒロエンにしているのは近代的で、外部とはガラス戸とランマで仕切っている。これも近代化のあらわれと考えられる。トコノマにはショイン・トコノマ・ブツダンがしつらえられ、うしろにウスベリが敷かれ竿縁天井になっている中廊下がつけられており、この部屋が接客上重要性であり且つ他の部屋よりしつらえ・仕様共に上につくっていることを示している。

オモテノマとチャノマの間は、フスマで仕切られているが、ランマはなく区切りのあることを示している。チャノマがA空間的性格をそなえているのも、このようなところからである。

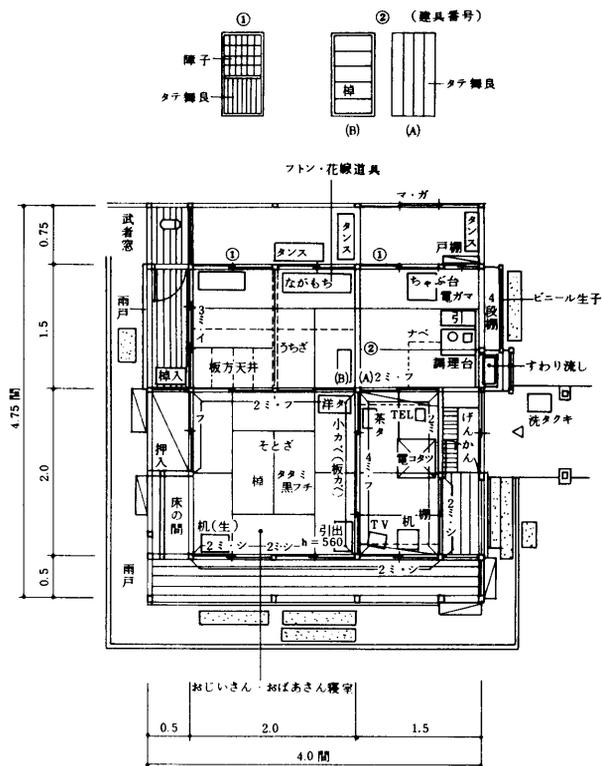
ウチ側は、炊事食事場空間のダイドコロ、風呂・便所等の設備群、個室としての性格が強いケショウベヤ、個室としてのコドモベヤが独立に到達できるようにとられている。居室は竿縁天井でできている。

このようなオモテ・ナカエ接合型は、中廊下型でないものまで含めかなり多い。この場合、ナカエはもはや元の「ナカエ」でなく、この家のようにA空間的に変わっているものが多い。また、この家に現れた個室や子供室・中廊下・玄関・広縁等は、旧い住宅形式から新しい形にかわるステップスタイルとして数多くあらわれており、ここに示したものはその典型と考えられるのである。

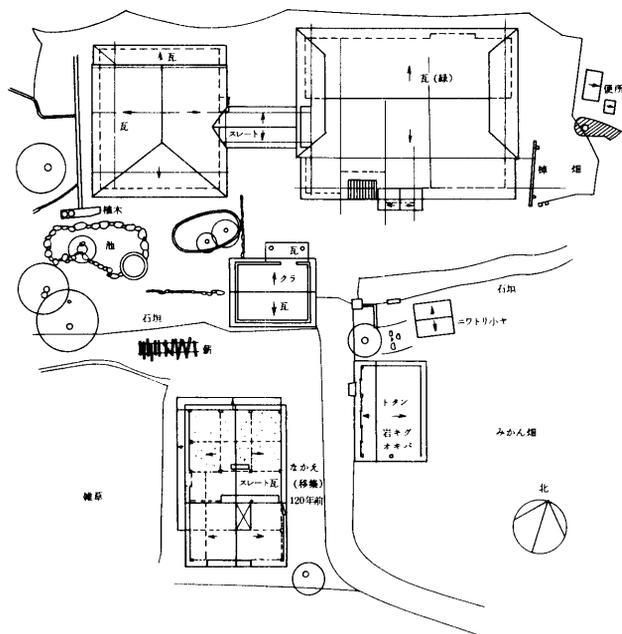
●隠居 元この家の母屋であった。74年前（明治37年）に建てたと言うが、120年の古さを持つ9尺幅の“てのま”と5間×5間と言う大きな“ナカエ”が附いていたが、母屋新築の際とり去り、“ナカエ”は前に移して物置にした。ゲンカンが、現在の正式のもの前にも



古川益澄 平面図



古川益澄 隠居平面図



古川益澄 配置図

う一つ上り口があり、知覧の武家屋敷のような姿をしている。部屋の呼び名も、オモテノマを“ソトゲ”と言っている。この前からも客が上れるようになっている。“テノマ”“ナカエ”があった頃は、立派な武家の家構えをしていたと考えられる。

このようにこの家は、武家様式から近代の農家様式に変わって行く形を示す典型例と言うことができよう。

8. 鹿児島県入来町等における生活と住居

●生活の種別 前に本報告集並びに日本建築学会に報告^{*18}したとおり、生活はその性質によって分けると次の4種のものになる。つまり、①生産生活または生産行為、②家事または家庭サービス行為、③家庭生活または純消費生活または個人乃至集団の家庭純消費行為、④接客または儀式・行事・日常接客である。この中で現在住宅平面に大いにかかわるのは③と④である。と言うのは①は生産技術や労働形態・生活思想の変化によって住宅内での行為は大きく減退し、②も生活技術や材料供給のあり方・食習慣等の変化により住宅内での家事行為の場所はかなり縮小され局限され整頓され、住宅平面決定の重要要因とは言えなくなったからである。また、これに反し、③は自我の発展等でその使用面積や区画は年々増加の傾向にあり、④も内容が変質しつつあるにしても旧来の空間は依然相当程度が要求され、それに新たな空間要求が加わる気配さえ見え、平面決定の大きな要素となって来たからである。今述べて来たのは現在の農村住宅についてであるが、伝統的な在来の農家住宅についてこれを見ると、過去においては、①は一部で一時期力をもったものの全体として見るとやはり平面決定時に床上の間取り決定にはそう大した力はなく、②は住宅内では設備も大した要求をせず、③は未発達のまま抑えられ、④のみが大きく採り上げられていたという生活型であり、空間決定因子の型であったと考えられる。ここで一つ注意しておきたいことは、①の生産活動が伝統的農家では平面決定に大きく作用すると考える研究者もあるであろうが、生産活動が殆んど住宅内になかった地域もあるし、生産活動が住宅内に入っている地方でもそれは農家全部ではなく下の階層の多くの農家ではその割合が極めて少なかった^{*19}と言うことである。従って、伝統的農村住宅を見る場合、④の接客、ムラ・ムレ・シムルイの儀式・行事・日常接客を研究することが一番大切であることが分かる。

●鹿児島県の農村におけるムラ生活の稀薄さ乃至欠除

今度の調査で分かったことは、入来町等鹿児島県西半においては、伝統的な住宅における旧い生活が、近世的農村生活のタイプを残していると見られる群馬県や茨城県とも、また中世的生活タイプとも見られる長崎県対馬とも異なるものを持っていると言うことであった。それは正月・盆のあり方や結婚式・葬式によくあらわれている。正月・盆の相互訪問は、馬場内や門内ではあったとしても、ムラうちのものはなかった。また、結婚式・葬式の際の助け合い及び参加客はムラビトでなくてシムルイなのである。このように、ムラは関東・対馬とその機能が異なり、イエに対して稀薄のようである。次に、その具体例を示そう。

●麓 ①入来町麓 12戸～15戸の規模の「馬場」と^{*21}

呼ばれる集団4つによって構成されている。が、麓全体の行事は祭しがなく、また馬場毎の行事もない。つまり、正月・盆ともムラの相互訪問はないのである。但し、正月、馬場の廻礼はあった。正月はカゾクとシムルイのトソの行事がカシタンマとシモンマで行なわれる。結婚式・葬式も手伝い・客とも麓(ムラ)・馬場(ムレ)は関係なく、シムルイが集って行なうのである。^{*21}

②大口市麓 3馬場から成っているが、麓全体が地域集団として事を行なったりすることをきかない。祭も武の神のものはあるが、地域の神はないようである。

③出水市麓 2馬場から成っている。②と同様。

④知覧町麓 ②と同様である。

●武家農村集落 ①入来町松尾 24戸が1集落を成しているが、正月・盆等に集落(ムラ)としての相互礼はなくシムルイのそれがあるだけであり、また祭りは松尾・黒武者・栗下・馬越4ムラのものはあるが、独自の行事ムラだけの神社がないからムラ祭りはない。結婚式は手伝い・客ともムラは関係なく、シムルイが集って行く。但し、葬式は松尾と黒武者・栗下と馬越が組になって夫々相手ムラに不幸があったとき手伝う。^{*22}

●門集落 ①入来町黒武者 集落内が萩元・黒武者・上野・田中・栗下の5門から成っているが、正月は門毎に門長の家に集りトソの行事をする。盆はシムルイの人がお互にお詣りし、ムラとしての祀りや各戸相互誂言や門としてのものはない。^{*23}神社は黒武者門の長が所有管理しており、12月25日に祭りがあったが門の祭りであった。後にムラの祭りに変化した。この外、上述のように4集落の祭りが行なわれる。黒武者門の門長の家には他地方の神棚とは異なる“家の社”とでも言うべき神社型がカシタンマ(O₁空間)に飾ってある。これはこの家にしかなく、同じ黒武者門でも他の家にはない。勿論、他の門の家にはない。結婚式は門とシムルイで手助けしたり客になつたりして行なり。ムラはこれに関係がない。但し、葬式のときは前出松尾の項で述べたように黒武者集落は松尾と組になってお互手助けし合う。^{*23}

②知覧町松山 松山門と若松門とがあるが夫々15戸内外の大集団である。松山門では正月に各戸の相互訪問が行なわれ、各戸は膳を用意して客を待ったと言う。これを“ぐるぐるまわり”^{*24}と称していた。盆は門内及びシムルイの人の相互のお詣りがある。^{*24}祭りは、廃滅したものが復興されて行なわれている。この門長の家にも家社がウツジャにまつてある。結婚式・葬式は、門が手伝い、客は親戚・知己が来る。^{*24}

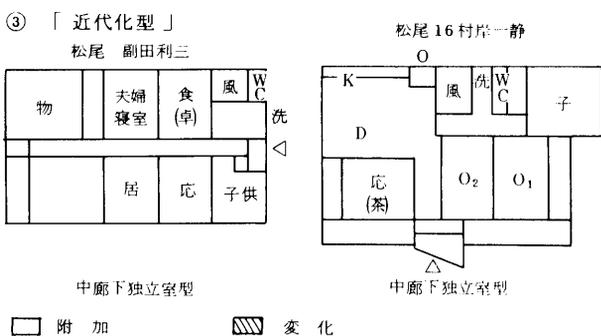
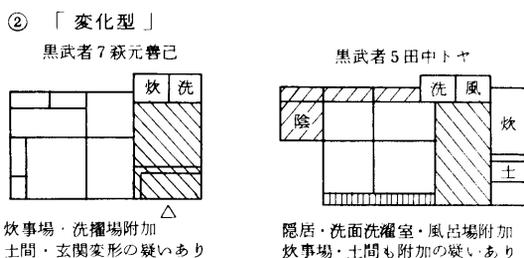
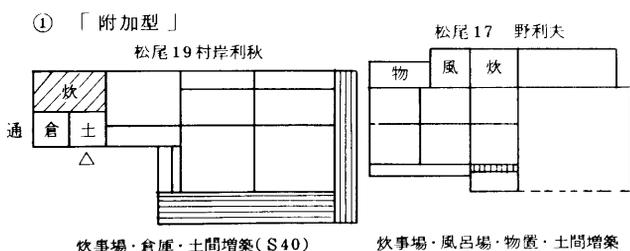
9. 平面の変化の動向

紙数の関係で詳述することはできないが、略述すれば次のようになる。

●変化動向の型 各型とも、形としては、①平面は変わらずに旧型に食事・炊事・入浴・個室空間等が附加される。「附加型」、②平面自身が変わろうとするが全体変化しきれず小部分変化する「変化型」、それに、③平面が全体として所謂近代的な型に変化する「近代化型」等がある。

●生活の変化 次に、生活としては、「家族我」の伸長、「接客」の残存等の問題があるが、これが、①各々の家で実際どの位のバランスになっているのか、②接客と言っても「シムライ接客」や「門接客」から「ムラ接客」にどの位変りつつあるのか、等の着目点がある。

●平面型変化の動向の例 上述の①「附加型」・②「変化型」・③「近代化型」を例示するなら次のようになるであろう。但し、一つの平面は上の「型」のいくつかを含んでおり、殆んどが単独には存しない。



10. 平面の意味の考察

平面を見て行く場合、①その中で行なわれる生活で見て行く行き方、②文化的伝播の産物として見て行く行き方、の2つが考えられるが、今回前者の方の追求を少し進めて見よう。

●O空間 オモテ(“おもて”母屋)のオモテ(空間)は、カシタンマ(上間)・シモンマ(下間)に分れるが、この両空間の間の仕切りは襖であり、田の字型の場合の

A || Dの仕切りが板戸(帯戸)であるのと異なっている。また、天井も以前はあらわしであり、一本の長い梁が縦にO₂・O₁にわたってかけられていて、両空間が一体の空間のように見えるようになっていた。生活も正月の家族または門や親類等の結集の儀式は、上間を主座空間にするものの、両空間を打ち抜いて行なっている。結果はウツザを通って行なう。最近、玄関部分がやや拡大してとられるとかナカエがここにとりつけられる等のことが行なわれ、玄関の性格がA空間的に変りつつある。また、これに伴って玄関の裏がB空間化しつつある。

●集団生活のムラの性格の強化 これまで述べて来た現象を社会的に見ると、ムラが昔と異なり現代的な意味でのムラ生活をするムラ構造に変りつつあることに対応して生じていると考えられる。これは、黒武者門や松山門の門長の神社が祭りがすたれたものまで復活しており、その復活のし方が門のみの祭りとしてでなくムラの祭りになっておる等、個乃至ムレの行事のムラの再編成が進行しているところ等からも言えるのである。現在では、他の地方と同様、ラーバン化が進み、生活がラーバン化してそれに対応する生活空間が形成されつつあると考えられるが、このことは今回はまだ深くは追求できなかった。

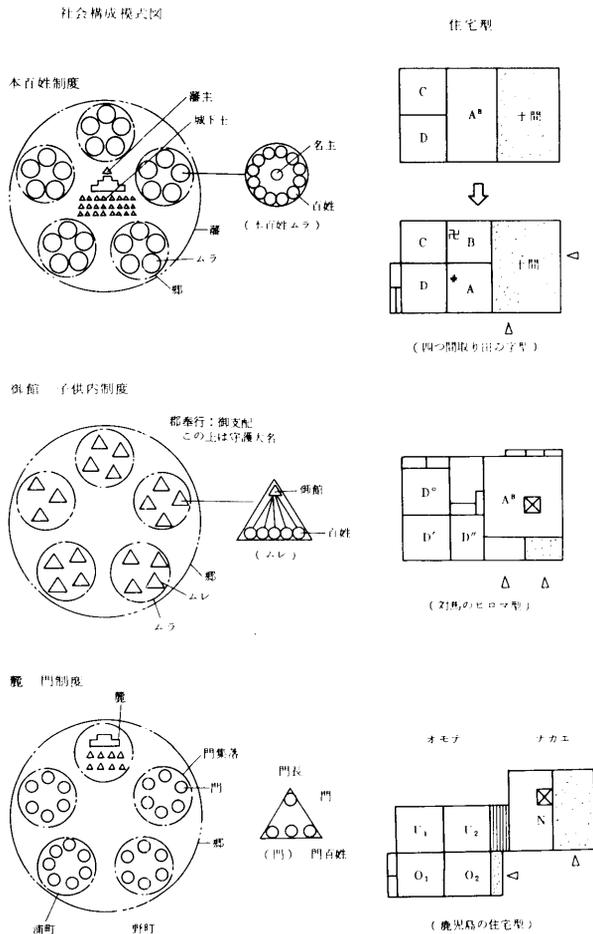
● 社会 — (生活) — [空間]

以上述べて来たことは、集約すれば上のような図式になろう。今後も、建築空間の発展を占うには、この図式が重要な意味を持つてくる。

因みに、伝統的農村住宅とそれを形づくった潜在的な力である生活や社会の型を対応的に機械的に示せば、次のようなものも一つのモデルとして考えることが可能であろう。前回の対馬、前々回の茨城・群馬も一緒に示すことにする。

社会制度	社会形態	住宅平面図	在所
本百姓制度	藩(御)一郷一本百姓ムラ	四つ間取り型	本州に広く分布
御館制度	藩(御)一郷一ムラ	御館集団 " " " " " "	対馬の 広間型 長崎県 対馬
府元制度	藩(御)一郷	馬場 " " " " " " 麓 " " " " " " 武家集落 門集落 野町 浦集落	鹿兒島の 住宅型 鹿兒島県

この図式で考えると、(生活) — [空間] の関係を捉えやすいし、これまでの地域性と平面の関係も理解し易い。但し、更に新しい事態に柔軟に適應するために、これに溺れたり固定的に考えたりしないようつとめたい。



注

1. 持田照夫・農村住宅の生活構造論的研究－平面形成の構造・日本建築学会大会学術講演梗概集・1976，全－自我生活発展の構造的解明・1977，持田照夫・日本農家の四つ間取り研究の到達点と問題点・日本建築学会機関紙「建築雑誌」53-11・1978
2. この例は諸所で見られるが，茨城県八郷町を調査中もこの例を見だし，群馬県赤城南西でも飯土井の石綿実太郎氏の家や鶴光路の持田照夫生家などがこのように改造された。いずれも，対外的な面で狭く不便である。
3. 前橋市後閑町T田B I氏方では，息子が大学卒の設計家で自宅も設計したが，在来の間取りを変えて公私室的に造った。
4. 八郎瀧干拓地の大瀧村では，居間と個室の組み合わせで住宅が造られているが，農業上のつき合いや隣近所及び親戚のつき合いは居間で行なうよう“生活設計”がされている。が，住宅改造が自由になると，入り口，接客空間が改造附加され，玄関や座敷もつけられ，現在は豪邸も出現している。前橋市朝倉町A Z美T氏宅は，A空間にコタツをつくり居間にしたが，本家の圧力で元のA空間に戻さざるを

得なかった。

5. 前橋市後閑町T田B Zさんの家は，つい2年程前に古い農家を建てかえたが，親子で話し合った結果「田の字型」にしたと言う。長男はやはり建築設計の方の職業をし自ら設計したが，隣近所の中廊下型の家が不便であること・やはり田の字型が一番生活に合っていること等と言う親の強い主張を容れてこのようにしたと言う。
6. 持田照夫・対馬のヒロマ型住宅の研究－空間構成の意味解明・日本建築学会大会学術講演梗概集・1978
7. 鈴木嘉吉ほか・鹿児島県の民家・1975，小野重郎・南九州民家図帖・1963
8. 野村孝文・南西諸島の民家・1960，では「分棟型」の名で特色づけ，母屋の平面の特色で呼んでいない。
9. 東北から九州まで広く分布しており，それも地域的集塊分布とは限らず，かなり一般の形で階層的に各地に分布している。伊藤延男ほか・岩手県の民家・1978，関口欣也・秋田県の民家・1978，角館町教育委員会・角館武家屋敷町並・1976，太田博太郎ほか・秋山郷の民家・1962，石原憲治・日本農民建築，参照。
10. 9の文献及び持田照夫の岩手県藤沢町大籠調査（1957），群馬の農村住宅探訪記・農村建築・1953，群馬県片品村利根村赤城村南牧村の調査，等により，ヒロマのうしろにネマのある型を確認し，これを＜東北型＞と呼ぶことにした。また，大河直躬ほか・日本の農家の四つ間取りの研究・財団法人新住宅普及会住宅建築研究所報1978でも，この＜中部型＞＜東北型＞を，標準型の3間取広間型・居間の後方に狭い寝間物置等を設けた広間型に分けている。＜中部型＞＜東北型＞は一つのムラに混在している場合がある。
11. 野村孝文・8と同じ文献による。
12. 鹿児島県知覧町麓森重堅氏より聴取。
13. 鹿児島県出水市麓伊藤信夫氏・税所敦子氏・大口市祁答院司氏より聴取。
14. 原口虎雄・幕末の薩摩・中公新書・1966
15. 鈴木公・鹿児島県における麓・野町・浦町の地理学的研究・1970
16. 本田親虎・入来町誌上巻・1964
17. この分類にいたるまでに，従来どのような分類が行なわれて来たのであろうか。紙数が足りないのでほんの概略を述べるなら次のようになる。小野重郎氏は「南九州民家図帖」の中で，イエ（母屋）とナカエ（中家）の結合のし方を中心にして住宅を分類している。これはイエ・ナカエ独立型等

10種程になるが、母屋の間取りについては分類していない。鈴木嘉吉氏ほかの「鹿児島の家」では、「おもて」の平面分類がなされているが、四間取（田の字形，喰違い四間取をふくめ）に類するものとひろま形三間取り類するものに大別し、あとは二室並列としている。

18. 持田照夫・農家の四つ間取りの研究・財団法人新住宅普及会住宅建築研究所報1976，持田照夫・農村住宅の生活構造的的研究－平面形成の構造・日本建築学会大会学術講演梗概集・1976
田照夫・農村住宅の生活構造的的研究－平面形成の構造・日本建築学会大会学術講演梗概集・1976
19. 対馬ではドウジで米搗きをした位であり、鹿児島及びそれ以南ではオモテには生産生活は入らなかった。ナカエには入ったが、床上空間の間取りを決定する要因にはなり得なかった。
20. 群馬県前橋市の鶴光路町は、かつて養蚕の盛んな地方であったが、養蚕をしたのは全部の農家でなく、一列2室型の住宅の家などは養蚕を極く僅かしかしないかまたは全くしないで他の養蚕家に備わって行くのである。このような家では、養蚕の間取りに与える影響は極く軽微である。このような家乃至村はこの集落以外にも多かったのである。
21. 本田親虎氏より聴取。
22. 松尾部落内古川益澄氏より聴取。
23. 黒武富士夫夫人より聴取。
24. 松山謙誠氏より聴取。
25. 九学会連合対馬共同調査委員会・対馬の自然と文化・1954，秀村選三・薩摩藩の基礎構造・1970，等参照し，対馬での吉田の岩佐氏等数多くの聴取結果も加味し，このモデルを考えた。秀村氏には直接お会いしてこの図式を見ていただき，このようなモデルは可なりとのお言葉をいただいた。